

兵庫津遺跡第50次 発掘調査報告書



2010
神戸市教育委員会

序

国際港湾都市である神戸は、港とともに今日まで発展してきました。その礎となったのは、江戸時代に「兵庫の津」と呼ばれた瀬戸内海航路の重要な港町であったからでした。そして、さらに遡ること奈良・平安時代の「大輪川の泊」の存在も忘れてはいけません。

今回の調査は、兵庫津遺跡での50回目の発掘調査となりました。調査の結果、中世後半から江戸時代を中心とした遺構が確認でき、江戸時代の町屋の様相が確認できたことはこの地域における土地利用の一端を示すものとなりました。兵庫津遺跡は神戸の経済を占い時代から担ってきた地域といえます。今後の発掘調査は、この遺跡のさらなる全容を解明するものと思います。

今回の調査成果をまとめました本書が地域の歴史研究、或は文化財の保護・普及啓発の資料として、市民の皆様をはじめ、多くの方々に広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本書の作成にご協力いただきました事業主である新日本石油株式会社をはじめ、関係諸機関に対し、厚くお礼申し上げます。

平成22年3月
神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市兵庫区兵庫町2丁目1-10~17で実施したガソリンスタンド建設に伴う兵庫津遺跡第50次調査の発掘調査報告書である。
2. この調査は、神戸市教育委員会が新日本石油株式会社からの委託を受けて、現地調査を平成21年7月9日から平成21年9月25日にかけて実施したものである。調査対象面積は約210m²（延べ1,040m²）である。また、神戸市西区に所在する神戸市埋蔵文化財センターにて出土遺物の整理、並びに発掘調査報告書の作成をおこなった。
3. 現地での調査は神戸市教育委員会学芸員井尻 格が担当した。保存科学調査は学芸員中村大介が行い、「8. 金属製品」については中村が執筆と遺物の写真撮影をした。遺物整理は学芸員黒田恭正、佐伯二郎が行った。本報告書の編集・執筆は井尻が行った。
4. 現地での遺構写真撮影は井尻が行った。遺物の写真撮影は、神戸市埋蔵文化財センターにおいて、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 牛嶋 茂氏の指導の下、杉本和樹氏（西大寺フォト）が行った。
5. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「神戸首部」「神戸南部」の一部及び、神戸市発行の2千5百分の1地形図「神戸駅」「兵庫」の一部を使用した。
6. 本書に使用した方位・座標は平面直角座標系第V系（世界測地系）で、標高は東京湾平均海水面（T.P.）で表示した。
7. 発掘調査の実施及び本報告書の刊行に際しては、事業者である新日本石油株式会社に多大なるご協力を頂いた。記して御礼を申し上げます。

調査体制

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古担当）

工樂 善通 大阪府立狭山池博物館館長

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会事務局

教育長 橋口 秀志

社会教育部長 大寺 直秀

教育委員会参事 柏木 一孝

（文化財課長事務取扱）

社会教育部主幹 渡辺 伸行

（埋蔵文化財センター所長事務取扱）

埋蔵文化財指導係長 丸山 潔

埋蔵文化財調査係長 千種 浩

文化財課主査 丹治 康明

同 安田 滋

同 斎木 嶽

調査担当学芸員 井尻 格

遺物整理担当学芸員 黒田 恭正

同 佐伯 二郎

保存科学担当学芸員 中村 大介



Fig.1 調査地を西上空から望む

目 次

序・例言

調査体制・目次

I. はじめに.....	1	III. まとめ.....	38
1. 兵庫津遺跡の位置.....	1	報告書抄録	
2. 兵庫津の沿革.....	2		
3. 兵庫津遺跡の調査.....	3		
II. 第50次調査の概要.....	4		
1. 調査の経緯と基本層序.....	4		
2. 第1遺構面.....	5		
3. 第2遺構面.....	8		
4. 第3遺構面.....	13		
5. 第4遺構面.....	18		
6. 第5遺構面.....	24		
7. 第6遺構面.....	26		
8. 金属製品.....	33		

I. はじめに

1. 兵庫津遺跡の位置

兵庫津と称されている地域は、古湊川によって形成されたと推定されている扇状地末端から砂州の臨海部に位置し、南北約2km、東西約1.5kmの広範囲に広がる奈良時代から近世にかけての遺跡として知られている。

江戸時代前期の兵庫津を知る上では、元禄9年（1696）に作成され、現存する最古の絵図で『攝州八部郡福原庄兵庫津絵図』（以下、「元禄絵図」）が存在している。都賀堤に囲まれた町屋は、兵庫津遺跡の一部に取り込まれている。

今回の調査地は、兵庫津の北東部に位置し、江戸時代は岡方に属し、元禄絵図の「西宮内町」と「長沢町」にある。周辺には寺院と町屋が混在する地域で、隣接する場所には、浄土宗法界寺、浄土宗長傳寺、禪宗妙福寺があった寺町の一角にあたり、町屋、寺院が立ち並んでいた。



Fig.2 調査地付近



Fig.3 兵庫津遺跡の範囲 (Scale 1:25,000)

2. 兵庫津の沿革

兵庫津は古くは「大輪田泊」とよばれ、史料による初見は、行基の伝記である『行基年譜』に天平2年（730）摂津国菟原郡宇治郷に「大輪田船息」を築いたとの記述があることである。

平安時代の終わり頃には平清盛によって「大輪田泊」の改修が2度も行われている。また日宋貿易の拠点となり大輪田泊は大きく発展した。鎌倉時代になると東大寺僧俊乗坊重源によって大輪田泊の人工島である経ヶ島の改修が行なわれている。このようにたびたび文献史料に登場するが、経ヶ島の実態については良く判っていない。

室町時代になると、東大寺領攝津兵庫北閻の記録簿である『兵庫北閻入船納帳』（1445）の文書からも窺い知れることが出来るように、寺社勢力の庇護のもとに瀬戸内海航路の良港として大いに繁栄し、貿易の拠点としての役割を担っていたことが判る。

兵庫津は遣明船の発着港として繁栄していたが、応仁・文明の乱（1467～1477）により町は荒廃する。その後、貿易の中心としての地位は堺に奪われ、港の役割も衰退していった。

天正9年（1581）池田恒興による花熊城を攻略後は、その部材を用いて兵庫城を築き、また、町の周囲には都賀堤と呼ばれる土堤を構築している。

慶長元年（1596）に発生した慶長大地震により、町は壊滅的な損害を被っているが、その後すぐに復興している。江戸時代、尼崎藩領になってからも港町として発展をしつづけ、18世紀の前半には2万人以上の人々が生活していた。兵庫城跡には陣屋が設けられ、明和6年（1769）には幕府の直轄領に編入され勤番所が設置された。また、町の中心部に西国街道が通り、宿駅が置かれ宿場町としても大いに脈わいを見せている。明治維新後には、兵庫県での最初の県庁が兵庫城跡に置かれた。



Fig.4 摂州八部郡福原庄兵庫津絵図（個人蔵・神戸市立博物館寄託）

3. 兵庫津遺跡の調査

昭和60年度、神戸市教育委員会が三川口町で実施した発掘調査を皮切りに、今回で50次を数える。これらの調査には、個人住宅建設による小規模な調査や共同住宅建設のような大規模な調査、そして国道の共同溝工事に伴う調査など様々なものがある。近年では年間の調査件数も増加し、町屋跡、寺院跡、蔵跡、堀跡などの遺構と共に膨大な数量の遺物が出土している。

平成10年度以降の第14・17・20・21次調査では、大量の瓦・壁土を含む焼土が確認された。豪商北風家の文書に記述されている宝永5年（1708）の大火による焼失した町屋群と考えられる。これらの調査から近世の町屋の様子が徐々に明らかになってきた。

近世寺院の調査では、平成13年度に芦原通で実施された第26次調査で、一遍上人終焉の地として有名な時宗真光寺の周囲を巡る堀割の一部と水路、道路を確認している。元禄絵図に描かれている寺域と一致し、絵図の正確性を証明する結果となった。

平成15年度に芦原通で実施された第32次調査では、奈良時代後期まで遡る可能性のある港湾施設の一部が確認され、奈良・平安時代の兵庫津の状況を考古学的に実証できた。

平成6年度から始まった兵庫県教育委員会による一般国道2号共同溝整備事業に伴う調査では、東西方向に長い調査地であったため各調査地点において中世～近世の遺構・遺物を確認し、様々な情報を提供する結果となった。



Fig.5 調査地点と周辺の調査地 (Scale 1:2,500)

(番号は調査次数)

II. 第50次調査の概要

1. 調査の経緯と基本層序

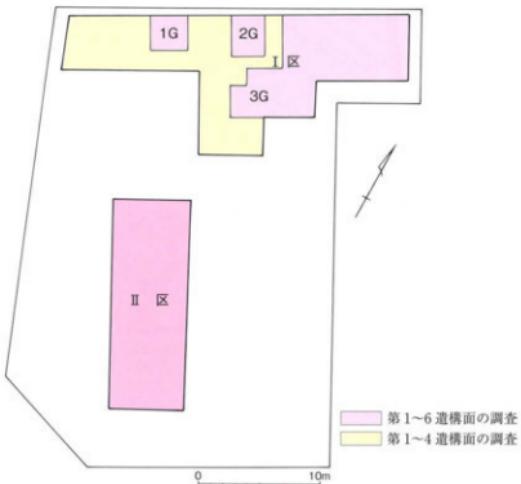
今回、神戸市兵庫区兵庫町でガソリンスタンドの建設計画に伴い、試掘調査を行った結果、中世後半と近世の遺物が出土した。このことにより敷地内で埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲約210m²を調査対象として発掘調査を実施した。

調査は、近・現代盛土層を重機により除去し、以下の層は人力により遺構・遺物の検出作業を行った。

調査区については、北側の調査区をI区とし、南側の調査区をII区として設定した。調査は基本的に工事で損壊を受ける箇所、I区の東半分、1グリッドから3グリッドとII区を第6遺構面まで調査を行い、その他の箇所は、工事影響深度の第4遺構面までの調査を行った。

今回の調査では、中世後半から近世にかけての6面の遺構面を確認している。I区に関しては、東側半分が搅乱の影響を受けており、3~4遺構面からの検出となった。II区に関しても、従前建物による搅乱が顕著で、北端の遺構面は最終面まで失われていた。

調査地の標高は概ね2.6m前後を測る。盛土・戦災焼土層の下約30cmで、淡黄褐色シルト～灰褐色砂質土の整地層を基盤とする第1遺構面となる。第2遺構面は、宝永の大火以降に整地された焼土層面及び整地層で、現地表面下約50cmである。宝永の大火以前の生活面が第3遺構面で、現地表下約80cmである。淡黄灰オリーブ色砂質シルトを基盤とし、上面の一部には土間状の貼土が行われている。その下第4遺構面は淡黄茶色細砂を基盤とし、95~115cm前後で面を検出している。第5遺構面は現地表下120~130cm、第6遺構面は現地表下155~170cmで検出している。いずれも中世後半の遺構面で、古湊川により堆積した茶褐色系の砂層が基盤となっている。現地表下約1.9m（標高0.7m）で湧水となるが、それより下層からも土師器が出土している。



2. 第1遺構面

第1遺構面は盛土以下約30cmの近世の整地面で、標高は概ね22~23mを測る。I区の東半は削平を受け遺構面は既に失われていた。確認できた遺構は、調査区西半部において土坑6基、井戸1基、竪状遺構1基、不定形遺構1基が検出されたのみである。

II区は、近世の整地面は確認したもの、後世の搅乱が著しく顕著な遺構は確認できなく、北側半分は從前建物の基礎により最終面まで消失していた。

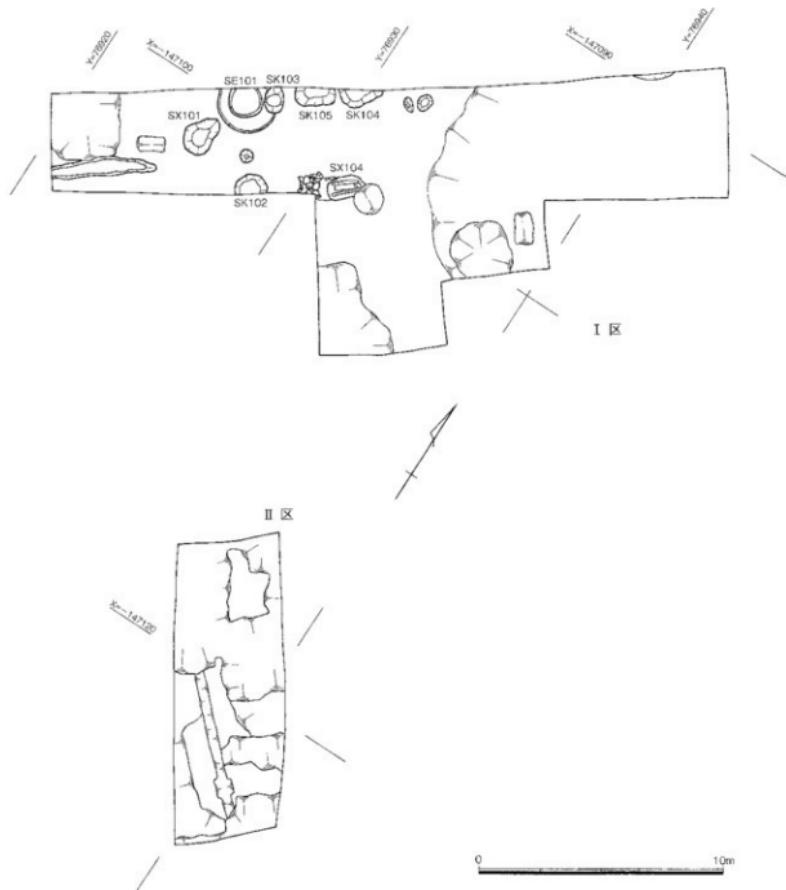


Fig.8 第1遺構面平面図 (Scale 1:200)



Fig.9 I 区 第1遺構面（東から）

SE101（井戸）

I 区西側の北壁際で検出された井戸である。井戸の掘方の直径は2.3mの円形を呈し、深さは1.3m以上を測る。井桁はすべて取り除かれていたため遺存していなかったが、井戸の下部には方形の掘り方が見られ、方形の切石を置いた可能性がある。

井戸廃棄後はごみ穴として利用されており、遺物としては、肥前系磁器、唐津焼の皿、丹波焼擂鉢、焙烙、瓦などが出土している。

SK103（埋甕遺構）

I 区の西側の北壁際で検出された長径1.1mの楕円形の土坑である。SE101を切り込んで掘られ、土坑内部の甕は底部が穿孔された状態で検出された。状況からして井戸枠への転用も考えられる。



Fig.12 SK103検出状況



Fig.10 第1遺構面出土遺物



Fig.11 SE101検出状況（南から）



Fig.13 SE101出土遺物

SX104（竈状遺構）

I 区中央部では竈状遺構が 1 基検出された。竈の上部は削平を受けていて、基底部しか残っていないかった。全体規模は、長さは 3m、幅は 1.3m 以上を測る。焚口を西側に開く竈は、燃焼部に砂岩系の石を側面と敷石に用い、長方形のコの字形をしており、長さは約 1.2m、幅は 55cm、検出面からの深さは約 20cm を測る。この内部には、赤く焼けた漆喰が覆い被さり、その下層には炭が堆積していた。また、燃焼部は、強い火力のため暗茶褐色に変色しており、石も脆くなっていた。また、これを取り囲む粘土も被熱のため赤褐色に変色していて長期間に渡り使用されていたことが伺える。焚口の背後には、石組みが存在し、漆喰で覆われていた。この竈に伴う建物の存在については確認できなかったため、屋内か屋外の施設であったか判断できなかった。



Fig.14 SX104検出状況（西から）

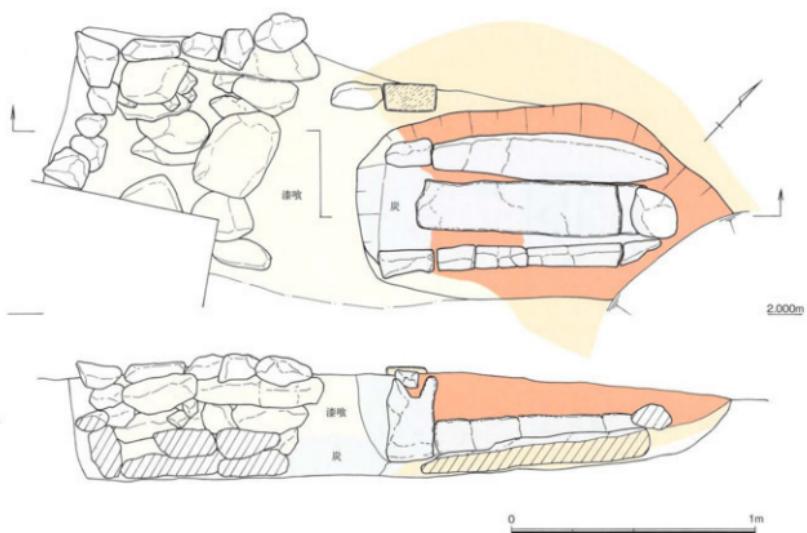


Fig.15 SX104平・断面図

3. 第2遺構面

第1遺構面から約20cm下がった面で、大火後の焼土層の上面および整地層が遺構面となる。部分的に土間状の貼土が焼けている箇所も見られるが、町屋を確認することはできなかった。

I区では、土坑13基、井戸1基、水溜め遺構1基、不定形遺構1基が検出されている。なお、調査区の東半分については、擾乱の影響を受けて遺構面が遺存していない状況であった。

II区については、擾乱の影響のため遺構面の遺存状態が良くなく、調査区南側で小土坑2基を検出したのにとどまった。

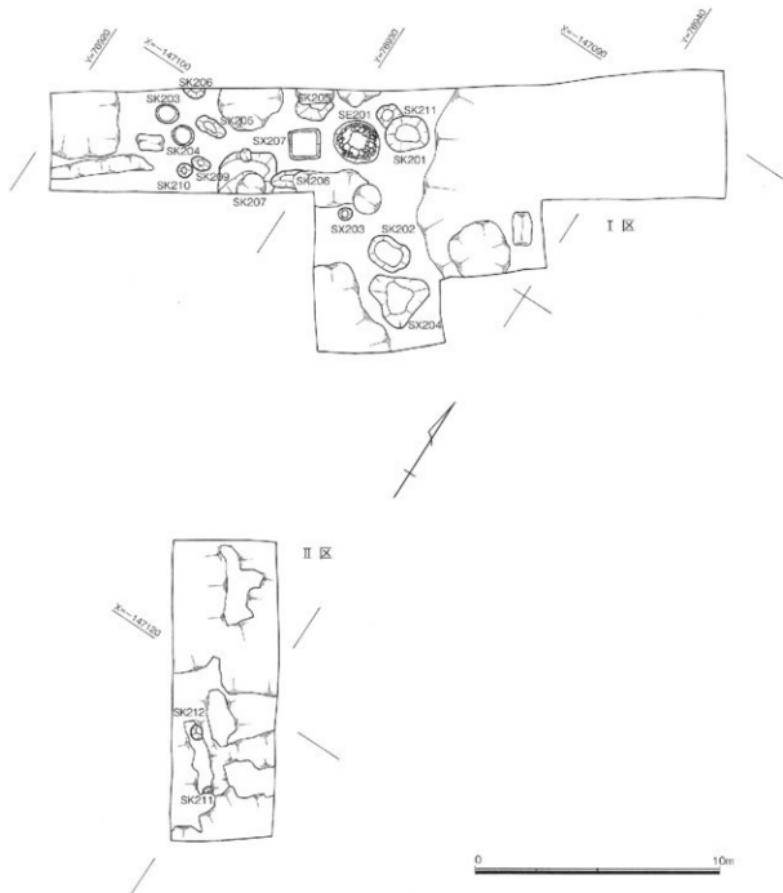


Fig.16 第2遺構面平面図 (Scale 1:200)



Fig.17 I 区 第2遺構面西半（東から）



Fig.18 II 区 第2遺構面（北から）

SE201（石組井戸）

I 区の中央で検出された、井桁が石組みの井戸である。井戸の掘方は $1.7 \times 1.8\text{m}$ の円筒形を呈し、深さ1.7m以上を測る。掘内に使われた石は大小様々な河原石ではあるが、上段の石積みは崩れているものが多く残りが良くない。現在でもなお、湧水があり標高0.6m前後で水位が保たれている。

井戸からの遺物としては、コンニャク印判を施した磁器碗や湯呑碗、丹波焼や備前焼の擂鉢、土師器皿、瓦、砥石、土錘、煙管などが出土している。



Fig.19 SE201検出状況（西から）



Fig.20 SE201出土唐津焼鉢



Fig.21 鉢の底部が穿孔された状態

上の陶器は、刷毛唐津とよばれる鉢で、器面に横向きに白土を塗られた波状の刷毛目装飾が見られる。高さ20.4cm、口径29.3cmを測る。底に穿孔が見られることから、植木鉢に転用されたと考えられる。

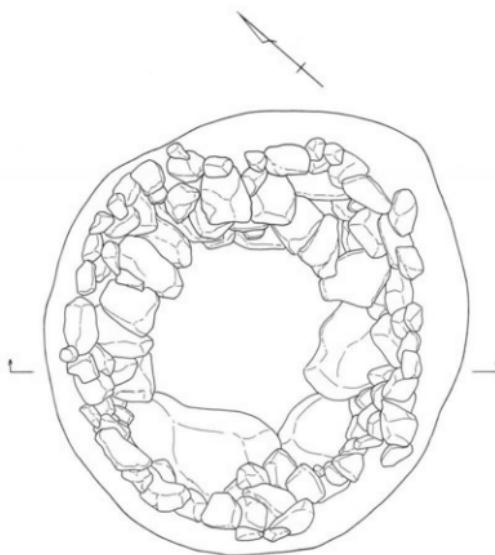


Fig.23 SE201土層断面（東から）

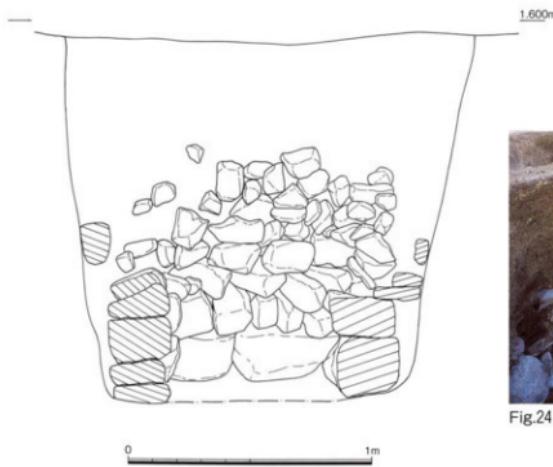


Fig.22 SE201平・断面図



Fig.24 SE201石組断面（西から）

SX207（水溜め状遺構）

SE201の西側で並んで検出された遺構である。一辺約1mのほぼ正方形を呈し、深さ85cmを測る。この遺構の縁周りには、黄白色粘土が貼られ、内部には板材で作った櫃のようなものが置かれていた。井戸の傍にあるために水溜め施設の可能性が考えられる。

遺物は、コンニャク印判による五弁花を施した肥前系の磁器碗や皿類、砥石、瓦、磚瓦、土錘、船釘類などが出土している。

Fig.25 SX207検出状況（西から）

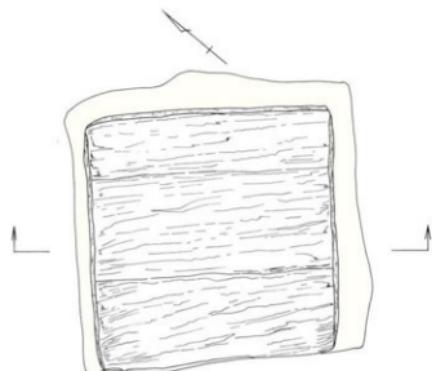


Fig.27 SX207出土遺物

2.000m

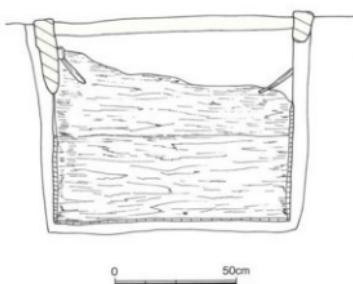


Fig.26 SX207平・断面図

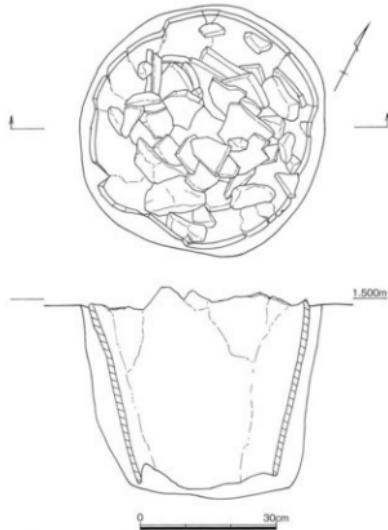


Fig.28 SX207出土瓦・磚

SX203（埋甕遺構）

I 区中央部で検出された埋甕遺構である。遺構の上層は削平を受けていたため、本来の検出面が判らないが、直径50cmの掘形をもつ土坑に深さ45cmところに据えられた状態で検出された。使用用途は判らないが、甕の底が抜けているため、井戸枠として機能していたとも考えられる。

右の写真は、SX203に埋められていた丹波焼の甕である。上部は欠損して本来の高さは判らない。残存高42cm、胴最大径51cm、残存底径30cmを測る。



SK202

I 区中央部の南側で検出された扁平な形状をした土坑である。長径約1.6m、深さ1.2m以上を測る。埋土は、砂とシルトが互層をなして堆積しており、徐々に埋まっていた感がする。この遺構内からは多量の陶磁器類と瓦が出土している。このような状況からして、一種のごみ穴遺構と考えられる。

出土遺物は、主に肥前系磁器が目立つが、皿、擂鉢、甕といった生活用品とともに土人形、錢貨、瓦がある。



4. 第3遺構面

宝永の大火（1708年）で被焼した土間面及び整地面が第3遺構面となり、標高1.8m前後を測る。I区の東側では、焼上が入った土坑が5基確認されている。これらの土坑は火事後の処理に利用され、焼土、石と瓦が投棄され、火事の凄まじさを物語っている。I区の中央では井戸1基が検出され、また西端では小土坑8基が集中して検出された。

II区は、おびただしい数の焼けた瓦を投棄した土坑3基、集石土坑1基、埋壺土坑が2基、その他多くの土坑を確認している。

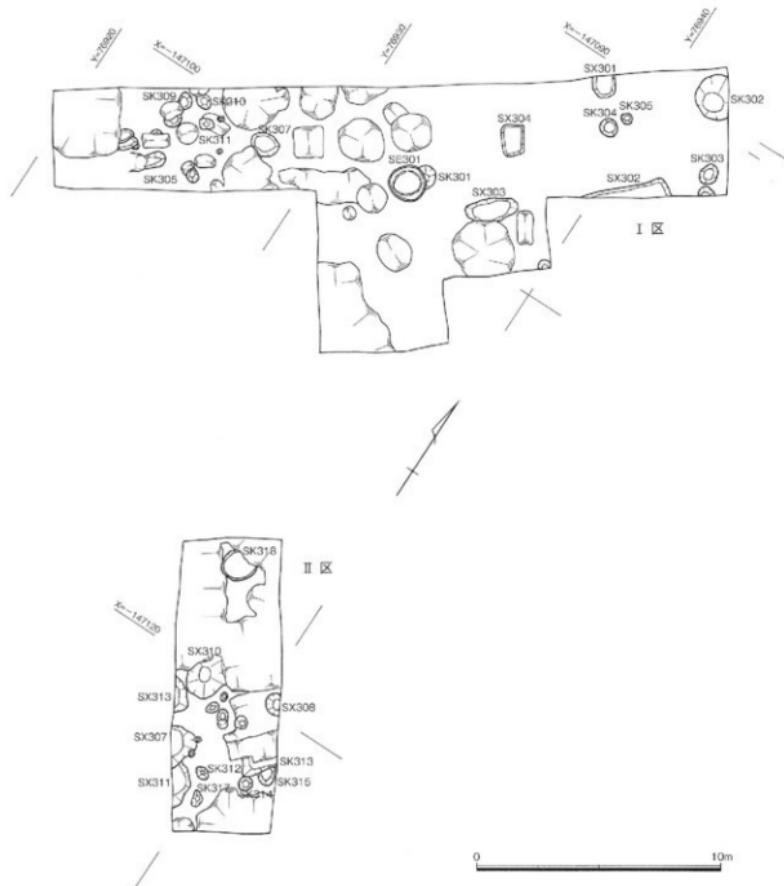


Fig.33 第3遺構面平面図 (Scale 1 : 200)

I 区の遺構



Fig.34 I 区 第3遺構面（西から）

SE301（井戸）

Fig.35 第3遺構面出土遺物



調査区中央で検出された直径1.5mの円形の井戸である。井戸の掘方は1~1.15mで、深さは1.2m以上を測る。井桁が円筒状の漆喰で構築されていて、井桁上部が倒壊した状態で検出した。深さ60cmまでは、焼土とともに陶磁器類、瓦、鉄釘などが投棄されていた。

SE301から出土した瓦（Fig.38）は、井戸に利用されていた瓦であるが、別の井戸に使われた瓦と考えられる。法量は一辺25cmの正方形で、若干湾曲している。厚み4.7~4.9cmを測る。



Fig.36 SE301土層断面（北から）



Fig.37 SE301検出状況（東から）



Fig.38 SE301出土の井戸瓦

SK307

調査区西側の焼土面下で検出された楕円形の土坑である。長径1.2m、短径1m、検出面からの深さ約50cmを測り、断面形体が擂鉢形の遺構である。

この遺構からの遺物としては、網目文をもつ飯碗、丹波焼擂鉢、堺・明石系擂鉢、土師質の十能、土鍤、煙管の雁首などがある。

II区の遺構



Fig.39 II区 第3遺構面（南から）



Fig.40 SK307出土遺物

SK314

調査区南側の焼土面の下で検出された直径60cm、深さ約20cmを測る円形の土坑である。遺物は、少量の陶磁器とともに伊万里焼色絵皿が出土している。この色絵皿は口径13.8cm、器高3.0cmを測る。

乳白色の素地に絵画的な絵柄を描く柿右衛門様式の皿である。高台内に「大明成化年製」の銘があり、国号もしくは年号を記したもので、2行6字銘で書かれている。



Fig.41 SK314出土の色絵皿（表面）



Fig.42 SK314出土の色絵皿（裏面）

SK318

調査区の北端、周囲が搅乱の影響を受け僅かに残った遺構面で検出した円形の土坑である。長径125m、深さ約50cmを測り、底が平らである。埋土は、暗灰白色砂とシルトが混ざり一気に埋められた感がする。

出土遺物が多く、食器としてはコンニャク印判を施した肥前系飯碗、湯呑碗、調理器具の丹波焼擂鉢、備前焼擂鉢、焰烙や水差し、土師器皿、煙管の吸口などの生活に関係する多種多様な器種が見られる。これらの出土遺物の傾向から、遺構の性格はごみ穴遺構と考えられる。

SX310（集石遺構）

調査区中央で検出した集石遺構である。遺構の北側と東側は搅乱の影響を受けて既に存在していないが、残存長150cm、深さ35cmを測る円形の遺構と判明した。上層の整地土を除去すると、瓦とともに大小様々な石が円形状に積み上げられていたが、上段は崩れ本来の位置を保ってはいなかった。下部の石は並んでいて、本来は数段に組まれた石積土坑と判断できる。この遺構の中央には、置き竈の一部と考えられる土製品が出土した。

SX311（落ち込み）

調査区南端の西側壁際で検出した肩部の角度の緩い落ち込み状遺構である。北側でSX307と切り合っている。遺構検出範囲が僅かで調査区の西側に広がるため全体規模は把握できない。南北長1.9m以上、最深部25cmを測る。

遺物の量は少なく、肥前系磁器、唐津焼碗、土師器（灯明皿）、錢貨などが出土地している。写真の土師器皿はまとまって出土したが、下層からの混入の可能性がある。



Fig.43 SK318出土遺物



Fig.44 SX310検出状況（北から）



Fig.45 SX311出土遺物

SX312（胞衣壺埋納遺構）

調査区南側で、直径約24cmの円形の土坑に壺が置かれ、内部に瓦質の蓋が入り込んだ状態で検出された。土師質の壺は、残存高17.8cm、胴径15.8cm、蓋の復元径は21.8cmを測る。この胞衣壺の中には遺物は入っていなかった。家の戸口や敷居の下などに埋納する例があるため、屋敷地に伴う可能性がある。兵庫津遺跡でも多くの胞衣壺遺構が検出されているが、容器として陶器が多く用いられ、蛸壺が転用されている例も多く見られる。



Fig.46 SX312検出状況（南から）

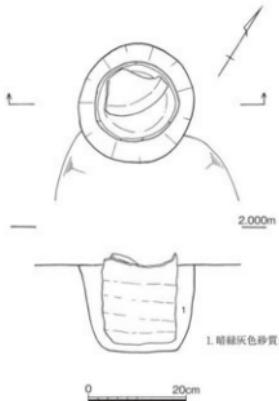


Fig.47 SX312平・断面図

土製品（人形、ミニチュアなど）

少量ではあるが、第2遺構面の遺構と第2遺構面を形成する整地土から土製品が出土している。内訳は、人形類、天神の人形、鳥形、動物の犬・蛙、ままごと遊びに使われた擂鉢・片口鉢などのミニチュアも出土している。釉を施したものや人形の一部に縁の彩色が残るものもある。鳥形と犬形は、中が空洞になっていて、振ると音が鳴る構造になっている。これらのものは、手づくりの製品もあるが多くの型づくりで大量生産されたものである。



Fig.48 SX312出土の胞衣壺と蓋



Fig.49 第2・3遺構面出土の土製品

5. 第4遺構面

第3遺構面から10~20cm下がった標高1.6m前後を測る遺構面である。I区東半では、ほぼ同じ方向に並ぶに石列が検出され、主軸を南北にもつ町屋が3棟並んでいたことが確認できた。また、調査区中央ではまとまって14基の土坑を検出している。

II区では、調査区の中央から南にかけて土坑5基とピット4基を検出した。しかし、I区で確認した町屋は検出されず、この区域での町屋の様相は判明できなかった。

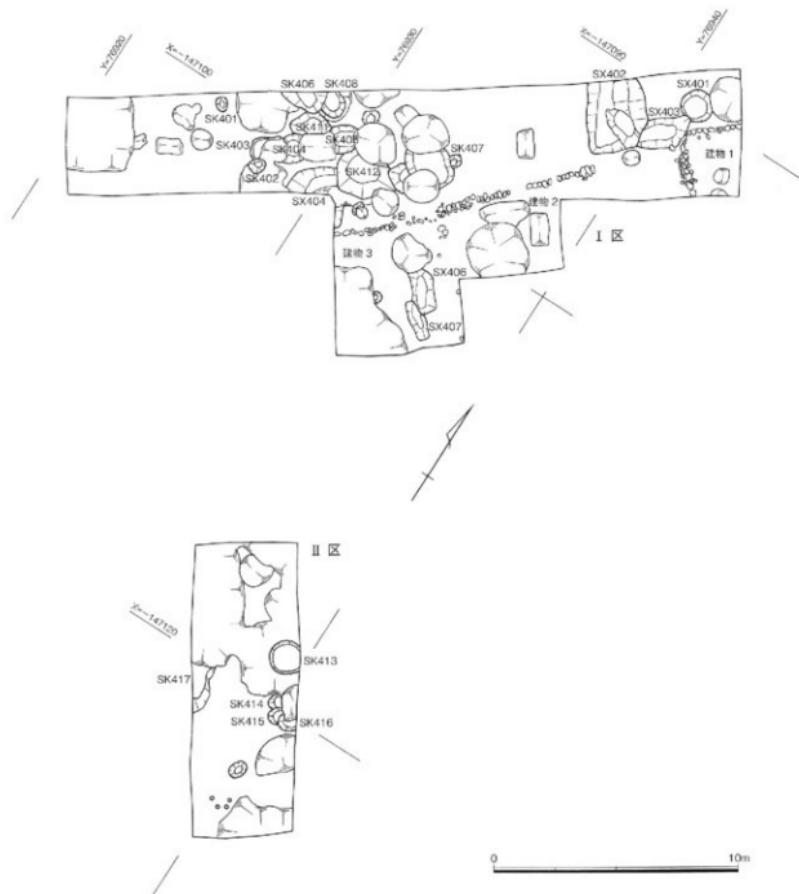


Fig.50 第4遺構面平面図 (Scale 1 : 200)



Fig.51 I区
第4遺構面（東から）

I区の遺構

I区の西側では、東西幅8mの範囲内に円形・楕円形の土坑が14基まとまって検出された。遺物は、主に陶磁器や土師器が出土し、不要になった生活用品を廃棄していると考えられる。用途不明な土坑も混在しているが、建物の裏側に当たる空間であるため、規模の大きい土坑はごみ穴遺構と考えられる。また、上層遺構面ではそれぞれ井戸を検出したが、この面では確認できていない。建物に伴う井戸の存在があるため、未調査部分に存在する可能性もある。

建物1

I区南東隅で町屋の北辺と西辺の石列の一部がL字形に検出された。石列の範囲は、東西2.4m以上、南北2.6m以上の規模である。建物の北西隅のみ検出し、東側・南側に未調査部分があるため、建物の奥行き・間口・構造は判らない。戸口は南側と思われるが、詳細は不明である。床面の標高は約1.6mを測る。

建物1の床面からの遺物は、肥前系磁器、胎土目の残る唐津焼皿、17世紀末～18世紀前半に想定される見込みに蛇ノ目状釉剥ぎを施した銅緑釉の皿、徳利、丹波焼擂鉢、須佐焼擂鉢、土師器皿、古寛永通宝2枚などが出土している。



Fig.52 建物1出土遺物



Fig.5.3 建物1～3平面図 (Scale 1 : 100)

Fig.54 津物1(北から)

建物2

I区の東側、建物1の西側で検出した東西6.6m以上、南北3m以上の規模をもつ町屋の一部である。石列の内側には土間が残存していた。建物の奥行きは南側に広がり、未調査部分にかかるため建物の全体規模・構造は判らない。建物1に対して約10cm低く、床面の標高は約1.5mを測る。

土間及び石列内からの遺物は少量であるが、肥前系磁器碗、柿右衛門様式の色絵碗、土師器、錢貨、鉄釘などが出土している。

建物3

I区中央の南側、建物2の西隣で検出された石列は、東西4m以上、南北5.3m以上の規模をもつ町屋の一部である。この石列は搅乱の影響を受けて残りがあまり良くなく、奥行き・間口とも調査区外に広がるため全体規模については判らない。また、建物1・2と同様に石列しか確認できていないため、建物の構造は不明である。床面の標高は約1.5mを測る。遺物は、石列内から肥前系磁器が数点出土している。建物軸の方向からして建物1～3は同時期に存在したと考えられる。

伊万里焼色絵碗

建物2の床面から出土した色絵梅樹文碗は、口径10.4cm、器高5.9cmを測る伊万里焼の磁器碗である。

この色絵碗の器面には、曲がりくねった梅の枝に紅色の花が咲いている風景を描写している。赤、青、緑の色彩を用いて描かれた文様は柿右衛門の白地の美しさを引き出している。

II区の遺構

I区において町屋遺構が検出されたのに対しII区における遺構の検出状況は非常に散漫である。調査区中央の東・西壁際においてSK413～417と南側においてピット4基が検出されたのみである。特に、搅乱下から検出されたSK413は、直径1.3m、検出面からの深さ約70cmを測る円形の土坑である。10～20cm大の多量の石が投棄した状態で検出された。遺物は、陶磁器、土師器、瓦、錢貨など多量に出土している。



Fig.55 建物1～3（西から）



Fig.56 建物2出土の色絵碗



Fig.57 II区 第4遺構面（南から）

SX402（落ち込み）

I区東側、建物1・2の北側で検出された東西長2.3m、南北長3m以上、深さ約30cmを測る長方形の落ち込み状遺構である。遺構の北側は調査区の外に広がり全体規模は不明である。

この遺構からの遺物は多く、主に肥前系磁器碗、土師器皿（灯明皿）、備前焼壺、土人形（西行）、土錘、硯、古寛永通宝、鉄釘などが出土している。

SX403（落ち込み）

建物1の北西側で検出された東西長1.7m以上、南北長1.2m、深さ15cmを測る長方形の落ち込み状遺構である。SX402に切られ、建物1の石列の下に遺構が広がる。

この遺構からの遺物は、肥前系磁器の他、見込みに蛇ノ目状釉剥ぎをした唐津焼の青緑釉皿、胎土目の残る唐津焼皿、17世紀末から18世紀前半の伊万里色絵油壺、丹波焼甕や土師質の十能の取手部分などが出土している。

土製品（仏像、人形、器物形など）

第4遺構面の各遺構と整地土からは、仏像（仏陀）、西行の人形、狛犬、箱庭道具の橋などの素焼きの土製品が出土している。



Fig.59 第4遺構面出土の土製品



Fig.58 SX402出土遺物



Fig.60 SX403出土遺物

須佐焼擂鉢

18世紀を中心に日本海側の近世遺跡や城下町で出土している山口県須佐唐津窯の陶器がある。主に擂鉢を中心とした鉢類で構成されており、建物1・2の床面、SK410、SX407からの出土がある。



Fig.61 第4遺構面出土の須佐焼
土製品（面子）

第4遺構面の各遺構と整地土から出土した円盤状に加工した土製品は、破損した容器・瓦などを面子（面打）として再利用したと考えられる。須恵器、土師器、陶器、瓦などの様々な材質が使われている。

焰烙（土鍋）

江戸時代には、土製の加熱調理器具で丸底をした土鍋である焰烙がある。炒めたり煎じたりする調理器具である。写真は主に第4遺構面を形成している整地土からの出土で、口径29cm前後のものが多い。



Fig.62 第4遺構面出土焰烙
硯

第4遺構面の整地土から出土した硯である。黒色の硯は粘板岩系の石材が使用されている。上側の硯は、長さ11.6cm、幅5.6cmを測り、磨面がよく磨滅しているため、よく使用されたものと思われる。



Fig.63 第4遺構面出土の土製品



Fig.64 第4遺構面出土の硯

6. 第5遺構面

第5遺構面は、標高1.4m前後を測る中世後半の遺構面である。I区では、工事影響深度の関係から調査区中央から東側にかけての範囲と3箇所のグリッドと調査となった。これらの調査区では、土坑6基、不定形遺構2基、ピット3基検出した。

一方、II区は、搅乱の影響が著しい調査区北側で土坑1基と集石土坑1基、中央から南側にかけて土坑6基、集石土坑1基とピット2基を検出した。

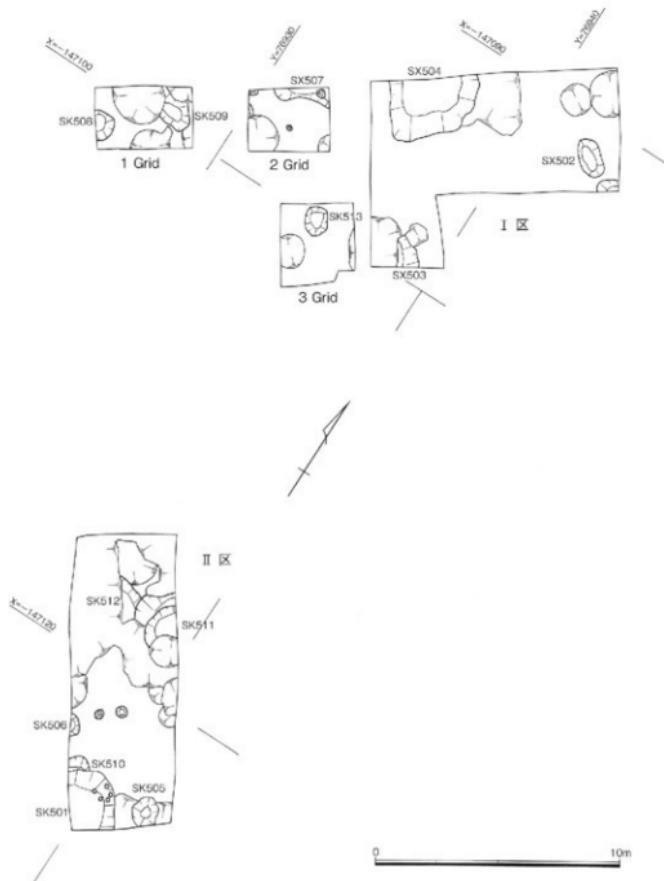


Fig.65 第5遺構面平面図 (Scale 1 : 200)



Fig.66 I区 第5遺構面（西から）



Fig.67 II区 第5遺構面（南から）

SK509

I区内1グリッドで検出された楕円形の土坑である。上層の遺構に切られているために全体規模は判らないが、長径1.3m以上、深さ60cmを測る。

遺構内からは、白色系と赤色系の2種類の土師器皿が出土している。白色系土師器は、口径10.5cm前後で赤色系土師器は、口径10~11cmを測る。これらの土師器の時期は、15世紀中頃～後半と考えられる。他の遺物は、瓦質土器、鉄釘などが出土している。

SK501

II区南西隅で検出された隅丸方形の土坑である。長辺2.4m以上、深さ50cmを測り調査区外に広がる規模の大きい遺構である。

遺構内からは、大きさの違う2種類の土師器が出土している。口径8cm前後の小皿と口径11~11.5cmを測る皿である。いずれの遺物も15世紀代を想定している。他の遺物は、須恵器、陶器などが多く量に出土している。

SK511

II区北側の東壁際で検出された大きな円形の土坑である。残存径1.3m、検出面からの深さ1m以上を測る。

遺構内に20~30cm大の石が多量に投棄された状態で検出された。出土遺物には、陶器、須恵器、土師器などがある。



Fig.68 SK509出土土師器



Fig.69 SK501出土土師器

7. 第6遺構面

この調査地で最終遺構面となる第6遺構面は、標高0.9~1mを測り、南側に向けて緩やかに傾斜している。I区の茶褐色細砂が形成している遺構面では、14世紀代を中心とした非常に多くの遺構を検出した。溝状遺構と多くの土坑、ピット、特に土師器皿を埋納した土坑は兵庫津遺跡の祭祀遺構を考える上で意義がある。

II区では、調査区南半で不定形の落ち込み4基とピット17基を検出した。

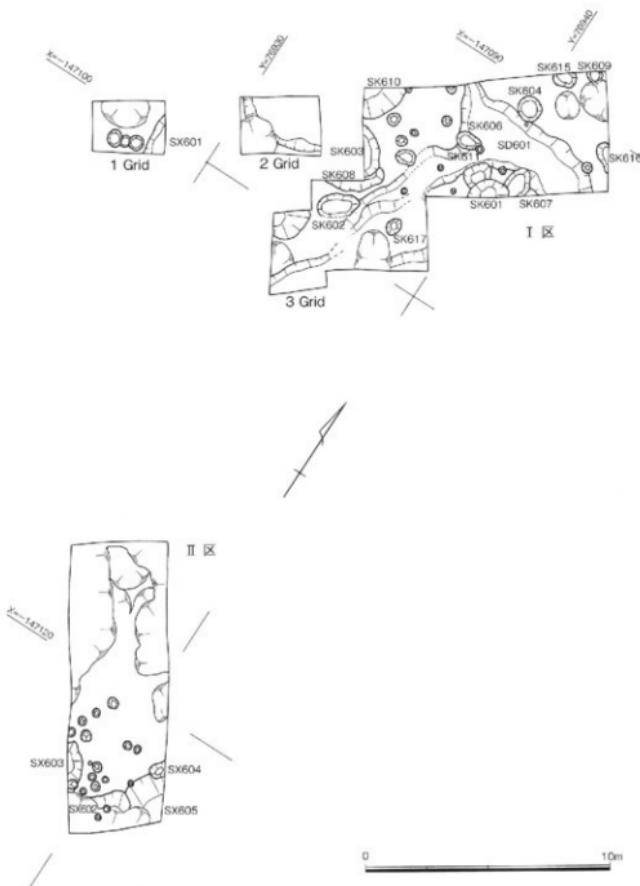


Fig.70 第6遺構面平面図 (Scale 1 : 200)

I 区の遺構



Fig.71 I 区
第6遺構面（西から）

SD601

調査区の南東隅から南西方向に流れている幅2.5~3m以上を測る溝である。検出面からの深さ約40~50cmを測り、この溝内からは、多くの土師器と須恵器、瓦器などが出土している。調査時には、溝と土坑、ピットを同一面で捉えているが、遺構の切りあい、検出状況から判断すると溝が埋没した後に安定した面でこれらの遺構が掘削されたと考えられる。

遺構内からは、主に口径8cm前後の白色系と赤色系の土師器小皿と口径10.5~11.5cmの白色系の土師器皿の2種類が出土し、他の遺物は、瓦器椀、東播系須恵器椀や備前焼鉢も出土している。

これらの遺物は特にまとまって出土していないく、上方からの流入と考えられる。

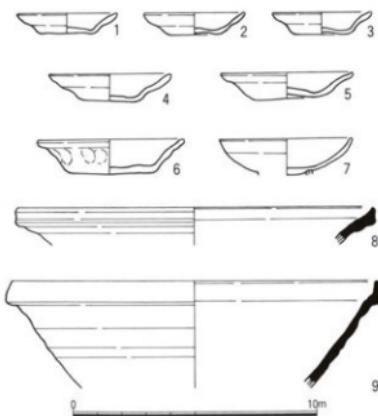


Fig.72 SD601出土遺物



Fig.73 SD601出土土師器

SK602（祭祀土坑1）

I区中央で確認された長径1.8m、短径1.2m、検出面からの深さ25cmを測る長細い楕円形の土坑である。検出状況は、土師器皿が大量に集積した状態で確認されている。出土状況は、土坑内面に皿の底部をはり付けるように敷きつめられている。そして、上位の皿が落ち込んでいる状態であるようにも見える。出土状況からして祭祀に関わる遺構と考えられる。

復元できる土師皿は50点以上あり、破片を含めると相当な数の皿が用いられたことになる。Fig76の22~29の土師器皿は口径8~9cmと小型で10~20の土師器皿は口径11.5cm前後を測る。22、23の土師器は口縁部に煤が付着しているため灯明皿として使用されていた。29は、口径14.6cmの土師器であるが、色調、胎土が他の器種と異なるため産地が違う可能性がある。

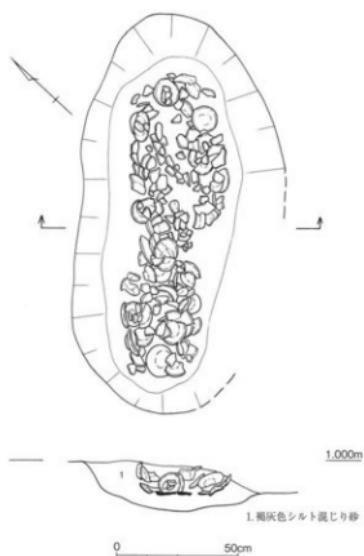


Fig.75 SK602平・断面図



Fig.74 SK602検出状況 (西から)



Fig.76 SK602出土土師器

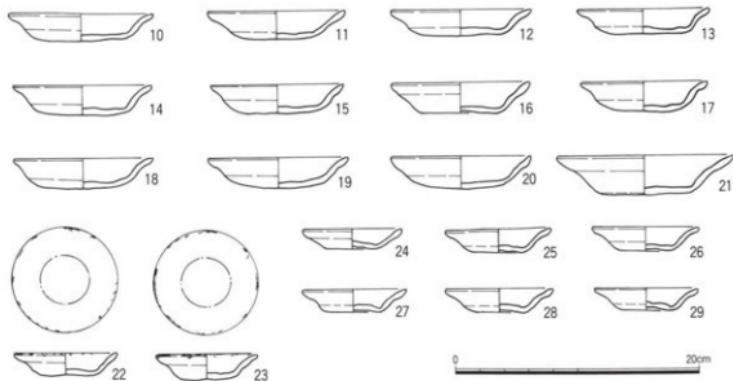


Fig.77 SK602出土遺物

SK607（祭祀土坑2）

SK611の東隣で確認された検出長1.3m以上、推定幅1m、検出面からの深さ約20cmを測る円形と考えられる土坑である。SD601検出中に溝の一部と判断していたため、本来の明確なプランを検出できていない。遺構から出土した土師器皿は完形品のものが多く、四十数枚の皿を水平に重なるように並べ、数枚は伏せて置かれている状態で検出された。状況からして祭祀に伴う遺構と考えられ、土師器皿は原位置をとどめていると思われる。また、土師器以外の遺物は出土していない。

出土した主な土師器は、Fig79の30～35の皿で口径8～9cmと小型のタイプと36～44の口径11～12cmを測るタイプの皿がある。



Fig.78 SK607検出状況 (東から)

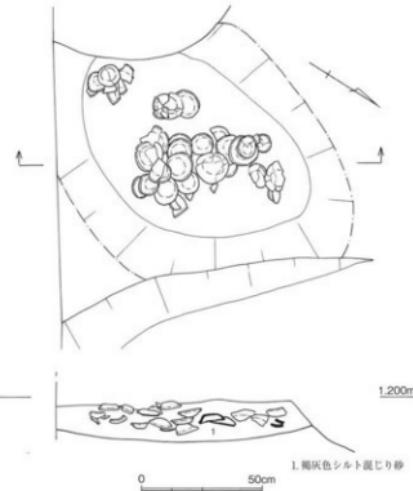


Fig.79 SK607平・断面図

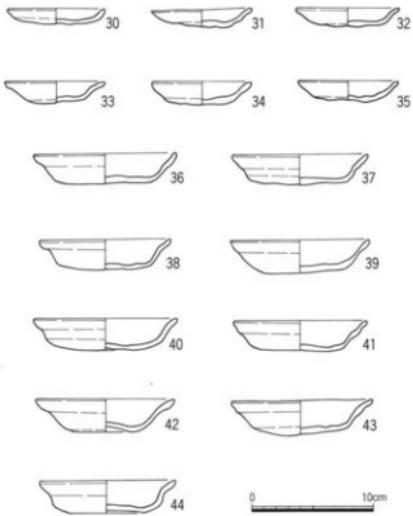


Fig.80 SK607出土遺物



Fig.81 SK607 出土土師器

SK611（祭祀土坑3）

調査区の中央よりのSK607の西側で確認された隅丸円形の土坑である。南側をSK601に切られているため全体規模は判らないが、検出長0.7m以上、幅約1m、検出面からの深さ45cmを測る。SK602・SK607と検出状況が異なり、土師器皿が一箇所に投棄された状態で検出された。出土状況は、皿が無造作に積み上げられ、祭祀後、遺物を土坑に廃棄したようである。

出土した土師器は、Fig84の45～57の口径11～12cmを測る皿が多いが、先の2つの土坑に比べて遺物の出土量はあまり多くない。



Fig.82 SK611検出状況 (東から)



Fig.83 SK611平面図

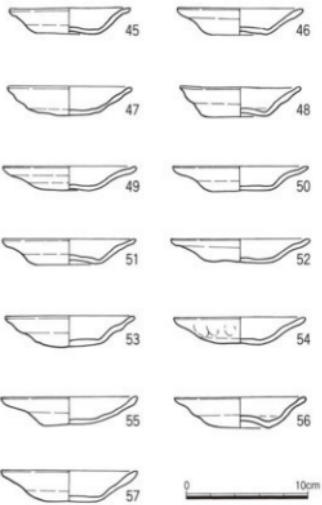


Fig.84 SK611出土遺物



Fig.85 SK611出土土器

ピット

調査区東半で十数基のピットを検出した。ピットは径10~20cmでSD601を検出中に確認したものが大半である。これらのピットは本来、SD601が埋没した後に掘られたものと推察される。ピット内に石を据えるものが多く、礎石の可能性が考えられる。ただし、ピットは建物として纏まりが確認できなかった。



Fig.86 I区東半・北壁土層断面と基本土層図

盛土・焼土	◆ 第1遺構面
淡灰白色砂～粗砂	
黄灰色～黄褐色粘質土	◆ 第2遺構面 2.00m
淡黄褐色～灰褐色砂質シルト	◆ 第3遺構面
焼土(宝永の大火に伴う)	◆ 第4遺構面
淡黄灰オリーブ色砂質シルト	◆ 第5遺構面
淡黄茶色細砂	
暗黄茶色シルト混じり細砂	
乳灰茶色細砂	◆ 第6遺構面 1.00m
乳灰白色細砂～極細砂 (砂 堆)	◆ 溝水

II区の遺構



Fig.87
II区第6遺構面（北から）

SX602

II区南端で検出された残存長1.5m以上、深さ約40cmを測る土坑である。上層の遺構に切られて全体規模は判らない。遺構内からは、14世紀前半と考えられる土師器、瓦器椀、東播系須恵器捏鉢などの出土がある。

SX603

II区南側の西壁際で検出された南北長2m以上、深さ約40cmを測る不定形の落ち込み状遺構である。遺構内からは、須恵器、土師器、鉄釘などの出土がある。

SX605

II区南東隅で検出された幅2m以上、深さ約50cmを測る円形を呈する落ち込み状遺構である。SX602、SX604との切り合いや上層の遺構に切られているため全体規模は判らない。遺構内からは須恵器、土師器が出土している。

ピット

径20~50cmのピット15基程まとまって検出された。ピット内に石を据えるものが数基あり、建物の礎石と考えられる。しかし、まとまりがなく、建物を特定することはできなかった。

下層の遺物

最終遺構面の下層に存する乳灰白色砂には明確な遺構を伴わないが、時期不明の土師器が数点出土している。これらの遺物は、周辺からの流れ込みと思われる。

最終遺構面の下層の乳灰白色砂は今までの人工的な整地層と違い自然堆積による地山に相当すると考えられる。これは沿岸部に特有の砂層の堆積である浜堤列に該当し、標高は0.8m前後を測っている。

8. 金属製品

金属製品は主に銅製品（82点）、鉄製品（133点）が出土しており、他に鉛塊も2点出土している。

銅製品は銅銭（神功開宝1点、渡来銭6点、寛永通宝48点、不明6点）が出土している。

58は神功開宝で、今回唯一の皇朝銭である。第5遺構面下層より出土している。鋳上りは良く、スもほとんど見られない。表面的な腐食も寛永通宝などよりも少ない。理化学的分析を行っていないため詳細は不明だが、素材の差によるものと見られる。

59～64は渡来銭である。59はSK501出土の皇宋通宝（北宋：初鑄1039年）である。外縁が一様に欠損し、故意的に打ち欠かれた可能性がある。破断面に研磨の痕跡は見られない。60は第6遺構面上から出土した至和元宝（北宋：初鑄1054年）である。61はSX504出土の元豊通宝（北宋：初鑄1078年）である。62は第3～4遺構面精査中に出土した元祐通宝（北宋：初鑄1086年）である。63はSX603出土の元符通宝（北宋：初鑄1086年）である。64はSX602出土の聖宋元宝（北宋：初鑄1101年）である。

65～112は寛永通宝である。出土遺構・層位等はFig.92を参照されたい。殆どは17世紀後半以降の遺構から出土しており、古寛永銭、新寛永銭ともに混在している状況と符合するものである。



58

Fig.88 神功開宝



58

Fig.89 同上X線透過画像



Fig.90 渡来銭

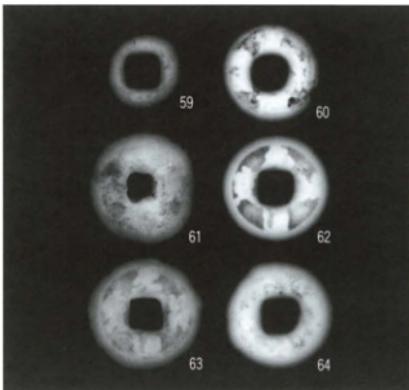


Fig.91 同左X線透過画像

番号	出土地区	出土遺構・層位	分類
65	II 区	第2～3遺構面	古寛永銭
66	II 区	第2～3遺構面	新寛永銭
67	I 区	第3遺構面	新寛永銭
68	II 区	焼土層上面	新寛永銭
69	II 区	焼土層上面	古寛永銭
70	II 区	第2遺構面上	新寛永銭
71	II 区	第2遺構面上	古寛永銭
72	II 区	第2遺構面上	新寛永銭
73	II 区	第3遺構面上	新寛永銭
74	II 区	第3遺構面上	新寛永銭
75	II 区	SK315	新寛永銭
76	II 区	SX309	古寛永銭
77	II 区	SX309	古寛永銭
78	II 区	SX308	古寛永銭
79	I 区	SX402	古寛永銭
80	I 区	暗灰色シルト層	古寛永銭
81	I 区	SK106	新寛永銭
82	I 区	第2～3遺構面	新寛永銭
83	I 区	第2～3遺構面	新寛永銭
84	I 区	第3遺構面以下	新寛永銭
85	I 区	SK202	古寛永銭
86	I 区	SX203	新寛永銭
87	I 区	SX104	新寛永銭
88	II 区	焼土層上面	新寛永銭
89	II 区	焼土層上面	古寛永銭
90	II 区	第2遺構面上	新寛永銭
91	II 区	第2遺構面上	古寛永銭
92	II 区	第3遺構面上	古寛永銭
93	I 区	第4遺構面上	古寛永銭
94	II 区	SK315	古寛永銭
95	II 区	SX308	古寛永銭
96	II 区	SX309	古寛永銭
97	II 区	SX309	古寛永銭
98	II 区	SX311	古寛永銭
99	I 区	暗灰色シルト層	新寛永銭
100	II 区	SX308	古寛永銭
101	I 区	建物1	古寛永銭
102	I 区	建物1	古寛永銭
103	I 区	SX404	古寛永銭
104	II 区	第5遺構面上	古寛永銭
105	I 区	建物2北側整地土	古寛永銭
106	I 区	SX104	II波銭
107	I 区	整地土	?
108	II 区	焼土層上面	?
109	II 区	SX309	?
110	I 区	SK413	?
111	I 区	建物1北側整地土	?
112	I 区	SX504	新寛永銭

Fig.92 寛永通宝一覧



Fig.93 寛永通宝

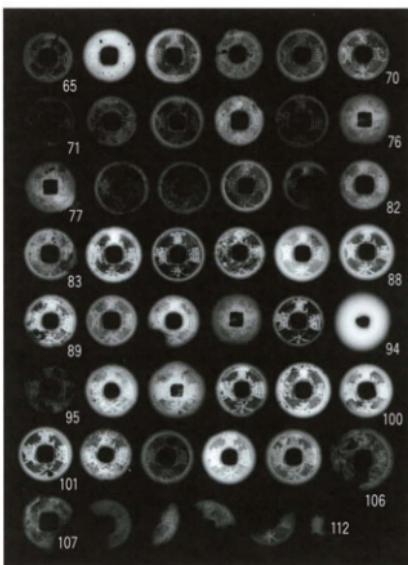


Fig.94 同上X線透過画像

113～122は銅製煙管の部品である。113は雁首で、漸移的に細くなった脂返しが上方へ湾曲し、火皿に接合する。火皿の直径は1.7cmを測る。115は首部上面に突帯状の補強がなされる火打付煙管の雁首である。脂返しが無くなり、肩が直接火皿に接合している。火皿の直径は約1.4cmを測る。脂返しの退化と火皿の小型化は煙管雁首の時間的変遷として捉えられるため、出土遺構の時期差と符合する。

116と119は筒状の部品で、内部に竹製羅字が残存する。これらは雁首もしくは吸口の肩部のみ残存したもののが可能性がある。

123は残存長7.7cmを測る小柄の残欠で、端部を欠損する。銅板を折り曲げ製作したもので、佩表に装飾は見られない。柄内部に鉄製の身が残存する。

128は銅製針金の両端を丸めたもので、茶瓶などの弦に使用されたものと想像される。現存する最大長20.4cmを測る。

132、133は銅塊、134、135は鉛塊で、ともに製作に関連する遺物と考えられる。

番号	遺物名	出土地区	出土遺構・層位
113	煙管雁首	II 区	SX309
114	煙管吸口	II 区	SX309
115	煙管雁首	I 区	SK102
116	煙管	II 区	SX309
117	煙管吸口	II 区	SK318
118	煙管雁首	I 区	SK307
119	煙管	I 区	SE201
120	煙管吸口	I 区	SX202
121	煙管吸口	I 区	SX404
122	煙管吸口	I 区	SX101
123	小柄	I 区	SK207
124	銅板	I 区	SK201
125	筒状銅製品	II 区	SX309
126	銅釘	I 区	SK412
127	銅製金具	II 区	第3遺構面上整地土
128	銅製弦	I 区	SX104
129	銅環	I 区	SK408
130	銅針金	I 区	SE201
131	銅板状	I 区	SX502
132	銅塊	II 区	焼土層上面
133	銅塊	I 区	SE201
134	鉛塊	I 区	暗灰色シルト
135	鉛塊	I 区	SX309

Fig.95 銅製品ほか一覧

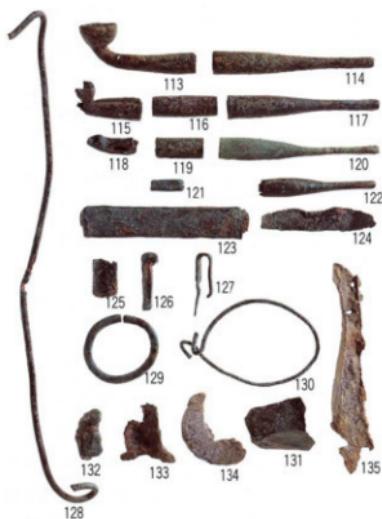


Fig.96 銅製品ほか

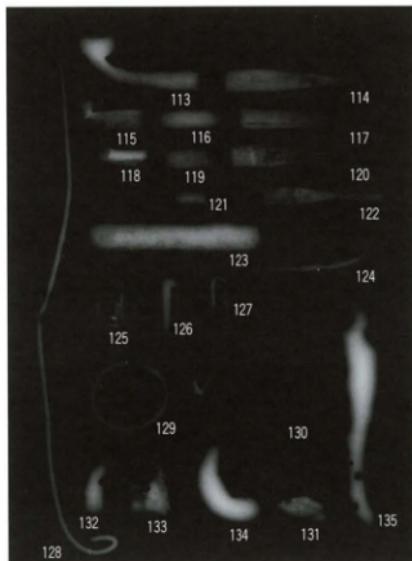


Fig.97 同上X線透過画像

鉄製品は全部で133点が出土しており、内119点が鉄釘である。特筆すべきは船釘（136～162）が27点存在することで、今次調査地点が船を使用していた区域に立地していることが示唆される。これらはすべて第2造構面の時期に属する。各遺物の出土層位、法量等についてはFig.100を参照されたい。

136～144は身部と同厚の頭部を直角に折り曲げたものである。身部幅の平均値は1.5cm、身部厚さの平均5.9mmを測る。このような幅広の身部を持つ部類はスイクギまたはオトシクギなどと呼ばれる。和船の舷側を製作する際、幅の狭い板材の長辺同士を結合し、幅広の材を得るために用いられる。

またこれらの身部には木質が錆着し残存している。樹種は未詳であるが、針葉樹製の板目取り板材の長側辺と長側辺をつなぎ合わせた様子が看取できる。

145～162は身部の横断面が正方形に近い長方形を呈するもので、頭部はスイクギ同様、身部端を折り曲げただけの形状である。身部断面は長辺が平均7.3mm、短辺は6.9mmを測る。このような釘はカイオレクギと呼ばれる。用途についてはコベリ（舷側上端の補強材）の固定などに用いた例が見える。

カイオレクギについても錆着する木質は針葉樹材であり、その殆どの身部中央付近に別材の接合線が観察できる。釘の上半は材の放射方向に、下半は繊維方向に平行に貫入していることがわかった。

163～179は頭巻釘である。端部を薄く打ち延ばした頭部形状で、打ち込んだ際、頭部を材に叩き込んで固定する。164、169、171、173、179などは未使用の製品と考えられる。法量はまちまちで、用途は疑定できない。

180はSK410出土の鎌先端部の残欠である。

181～183は厚さ5mm前後の不定形鉄板である。X線画像からは濃淡が認められ、铸造斑と考えられる。

184はSX101出土の板状で、厚さは2.1mmを測る。

185はSE201出土の環付金具である。環は太さ8.7mm、直径5.9cmであり、双脚の割りピン状金具に接合している。厚さ3.1cmの木材に固定されていた様で、木質が残存している。



Fig.98 船釘

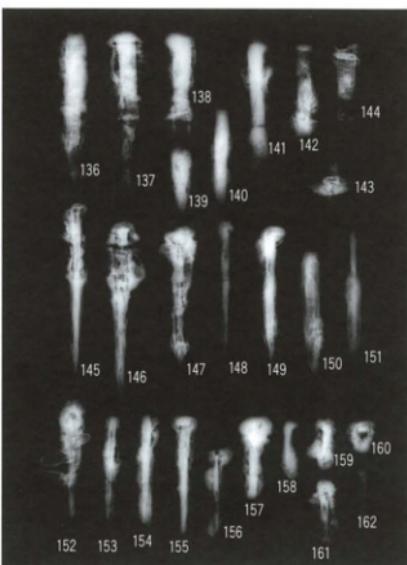


Fig.99 同上X線透過画像

番号	出土地区	出土遺構・層位	釘種	身部幅×厚み
136	I 区	SX207	オトシクギ	16.6×9.8
137	I 区	SX207	オトシクギ	15.1×5.8
138	I 区	SX207	オトシクギ	16.5×5.5
139	I 区	SK201	オトシクギ	16.1×4.0
140	II 区	第2遺構面	オトシクギ	11.3×5.2
141	I 区	SE201	オトシクギ	13.5×4.8
142	I 区	SX207	オトシクギ	13.6×5.6
143	I 区	SX207	オトシクギ	13.1×6.2
144	I 区	SX207	オトシクギ	14.5×6.6
145	I 区	SX207	カイオレクギ	9.4×6.6
146	I 区	SX207	カイオレクギ	9.4×6.9
147	I 区	SX207	カイオレクギ	7.4×6.0
148	I 区	SX207	カイオレクギ	7.1×5.6
149	I 区	SX207	カイオレクギ	7.8×7.6
150	I 区	SX207	カイオレクギ	7.6×7.4
151	I 区	SX207	カイオレクギ	6.7×5.3
152	I 区	SX207	カイオレクギ	7.1×5.2
153	I 区	SX207	カイオレクギ	7.0×7.0
154	I 区	SX207	カイオレクギ	7.8×6.1
155	I 区	SX207	カイオレクギ	6.5×6.2
156	I 区	SX207	カイオレクギ	7.3×7.0
157	I 区	SX207	カイオレクギ	6.7×6.1
158	I 区	SK203	カイオレクギ	6.7×6.3
159	I 区	SX207	カイオレクギ	7.0×7.0
160	I 区	SX207	カイオレクギ	7.4×6.5
161	I 区	SX207	カイオレクギ	6.4×5.8
162	I 区	SX207	カイオレクギ	6.6×6.2
163	2 G	落ち込み	頭巻釘	5.0×6.3
164	II 区	SK510	頭巻釘	6.0×6.0
165	I 区	SK604	頭巻釘	4.4×4.8
166	2 G	第6遺構面上	頭巻釘	4.7×5.1
167	I 区	SD601	頭巻釘	4.8×4.2
168	I 区	SK604	頭巻釘	3.0×5.4
169	I 区	SK611	頭巻釘	3.6×4.7
170	II 区	SX602	頭巻釘	5.0×4.8
171	I 区	SK611	頭巻釘	4.6×4.0
172	I 区	SD601	頭巻釘	4.3×3.9
173	I 区	SK615	頭巻釘	4.3×4.4
174	I 区	第5遺構面上	頭巻釘	4.4×4.5
175	I 区	SD601上層	頭巻釘	4.5×5.1
176	I 区	SK408	頭巻釘	4.4×4.3
177	I 区	SK404	頭巻釘	3.5×2.7
178	II 区	第5~6遺構面	頭巻釘	3.0×2.7
179	3 G	SD601上層	頭巻釘	2.9×2.8

Fig.100 鉄釘一覧



Fig.101 鉄製品

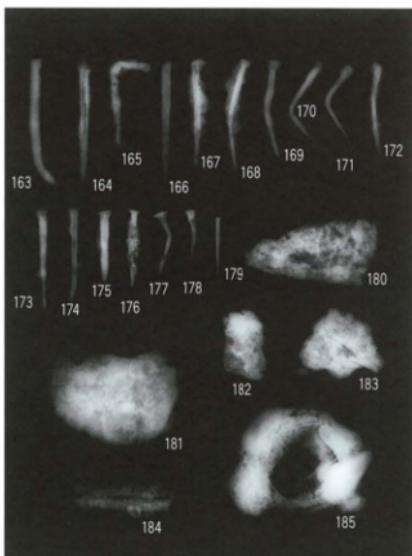


Fig.102 同上X線透過画像

III. ま と め

兵庫津遺跡の発掘調査も今回で50次を数え、過去の調査では、奈良時代から江戸時代までの多くの遺構・遺物が確認された。江戸時代においては町屋跡、寺院跡、墓地、堀跡など多種多様な遺構が検出され、近年までに膨大な情報が蓄積されつつある。今回の調査では、近世（江戸時代）～中世後半の様々な遺構・遺物を検出し、各時期の様相の一端を垣間見ることができた。

(1) 兵庫津の調査を行う際に年代の指標となるものに出土遺物の時期を検証するほかに、文献史料の方面から北風家文書の『北風遺事』に記述されている「宝永の大火」の記述がある。

当調査地でも、焼け縮まった焼上面を検出しているため、このとき形成された面は1708年以降と類推できる。ただし、町中では頻繁に火事が起きていたことが予測できるため、慎重な検証も必要である。今回の調査では、出土遺物の時期を精査しながらこの事象を境にして第2面と第3面を区分している。

(2) 近世の兵庫津を描いた絵図は複数知られているが、現存する最古の絵図として『振州八部郡福原庄兵庫津絵図』が存在する。精度が高いとされているこの絵図と現在の地形図を対比させ、街路部分を重ね合わせると若干の差異はあるもののその正確さが見られる。

当地は、「長沢町」と「西宮内町」にまたがり、「妙福寺」の西側、「法界寺」の北側に位置し、寺町の一角に想定される。調査地付近の絵図の描写では、街路に面した建物の屋根がケバ立った表現をした藁葺き屋根の建物の様子が描かれている。絵図の作成年代からすると第3遺構面がその時期に該当する可能性があるが、今回の調査では町屋を検出するのには至っていない。

(3) 屋敷地割であるが、「北浜」の平均的な規模は間口二～三間、奥行六～七間の広さに対し、「岡方」は間口十間あるものや正方形に近い敷地を持つものもあり多彩である。調査地のある長沢町・西宮内町は岡方に属していた。岡方の十八町には多くの農民が住居を構え「地方」とも呼ばれていた。

第4遺構面では、3棟の町屋を確認したが、遺構の検出状況から察するに建物の裏側に当たると思われ、建物本体の存在する南側は未調査部分にあたり、建物の規模・構造や地割の解明はできていない。今回一面しか町屋を確認できていないが、本来、建物の建替えに際しては、建物があった空間に建てられるため、上層遺構面での町屋の存在は否定できない。この建物の石列内や床面からは、概ね17世紀後半から18世紀前半に収まる遺物が出土しているため、この時期を想定したい。

(4) 第6遺構面で土師器皿がまとめて出土した土坑3基が確認された。いわゆる「かわらけ」を用いる祭祀土坑の存在は、兵庫津では既に14世紀前半には広く行われていることが過去の発掘調査事例で判ってきている。

当調査地では、土坑に皿を整然と並べて埋納するタイプと一括投棄するタイプの2種類が存在することが判った。こうした祭祀行為は民衆の精神文化の一端であるため、広義には祈念の場ではあるが、詳細に検証する必要があるために今後の調査事例の増加を待ちたい。

調査区が狭小ではあったが、概ね14～15世紀代の中世の遺構、17世紀後半～19世紀代の近世の遺構を検出することができた。そして、28ℓコンテナに換算して約50箱の遺物の出土量と今回の調査成果を今後の調査に反映させ、多くの遺物資料の活用を図るものである。

報告書抄録

ふりがな	ひょうごついせき だい50じょうさ はくつちょうさほうこくしょ							
書名	兵庫津遺跡 第50次調査 発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	井尻 格（編）・中村大介							
編著機関	神戸市教育委員会							
所在地	〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL 078-322-6480							
発行年月日	西暦2010年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
兵庫津遺跡	兵庫県神戸市 兵庫区兵庫町 2丁目1-10~17	28103	4-24 40' 15"	34° 10' 21"	133° 10' 21"	20090709 ~20090925	210m ² (延1,040m ²)	ガソリンスタンド 建設事業
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
兵庫津遺跡	集落跡	中世		ピット、柱穴 溝、落ち込み		須恵器、土師器、 陶器、瓦器、錢貨		
		江戸時代		町屋建物、 井戸、十坑、 竈遺構		兩面鏡、土師器、 瓦、土製品、金属 製品、錢貨		
要約	今回の調査では、中世後半（2面）から近世（4面）にかけての遺構面が6面確認できた。特に第4遺構面では、町屋が3棟確認でき、当地域における地割の一端を見ることができた。第6遺構面で検出した「かわらけ」を埋納した土坑は、兵庫津遺跡における中世の祭祀を考える上で資料を得ることができた。							

兵庫津遺跡 第50次調査 発掘調査報告書

2010.3.31

発行 神戸市教育委員会文化財課
 〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号
 TEL 078-322-6480

印刷 デジタルグラフィック株式会社
 神戸市中央区介天町1-1
 TEL 078-371-7000

